

イネもみ枯細菌病

1 病原菌の特徴

イネもみ枯細菌病は九州から東北地方までの各地に発生するイネの病害で、以前は九州地方に多い病害でしたが近年は関東地方でも増加の傾向にあります。細菌により発生する病害で、病原細菌は *Pseudomonas glumae* です。種子伝染するため、種もみが第一次伝染源となります。罹病もみを浸種すると、病原細菌が遊出して健全もみを侵し、は種後に苗腐敗を生じます。また、苗腐敗を生じない苗も体内に保菌し、出穂前後に穂に移行してもみが発病します。発病穂は周囲の穂への二次伝染源となり、被害が拡大します。

2 被害の様子

- (1) 箱育苗の苗と本田の穂に発生します。
- (2) 苗では緑化時から硬化時に葉鞘部が淡褐色に変化し、しだいに濃褐色になり、腐敗枯死します。葉令が進んでから感染した場合は、葉鞘が褐変・腐敗し、芯葉は基部が腐敗し抜けやすくなるか、葉の基部が退色し白くなります。苗の腐敗は坪状に発生します。
- (3) 穂では出穂・開花期以降のもみが急に枯死します。初期にはもみの基部が黄白色となり、のちに変色部は拡大してもみ全体が緑色を失い灰白色となります。やがて全体的に淡紅色を帯びた黄褐色となります。通常、発病はもみだけで穂軸や枝梗は緑色を保っており、重病穂では穂が直立したままとなります。
- (4) 発病もみは罹病程度が高いと不稔になりますが、程度が低いと死米や不完全米となります。これらの玄米には健全部と病斑部の境に褐色带状斑と呼ばれる褐色の帯が現れることがあります。これは本病罹病玄米の特徴的な症状であり、診断する時の重要な指標となります。



写真1 苗での発病(苗腐敗症)



写真2 穂での発病(籾枯症)
罹病穂は直立する



写真3 被害粒(玄米)
褐色带状斑が特徴

3 発生について

(1) 発生条件

- ア 種子伝染するので、保菌種子を使用すると発病します。
- イ 催芽温度、出芽温度は 30℃を越えると発病苗率が高くなります。
- ウ 穂の発病は、出穂期から出穂 10 日後頃までに降雨があり高温に経過すると助長されます。

(2) 発生消長

< 本県で発生の多い普通栽培の事例 >

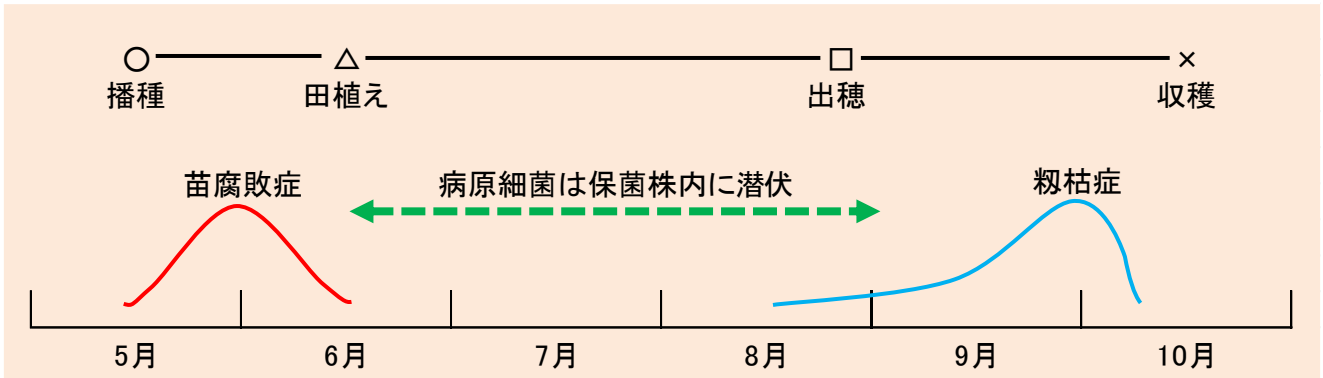


図1 もみ枯細菌病の発生消長

4 防除時期と防除方法

種子で伝染するため健全種子を使用し、種子消毒を実施することが防除の重要なポイントです。

実施時期 (イネのステージ)	防除方法
播種前	種子は無病ほ場から採種します。 塩水選(比重 1.13)を行い、罹病種子を除去します。 次のいずれかの方法で種子消毒を実施します。 ○温湯消毒 60℃15分間浸漬し、浸漬後直ちに水で冷却します。使用する種子は乾燥もみを使用し、保存年限の長い種子は避けましょう。 ○薬剤による消毒 登録のある薬剤で消毒します。
浸種 ~ 育苗期	30℃を越えないように管理します。
出穂前 ~ 出穂期	登録のある薬剤を散布します。

薬剤防除を実施する場合は、

- 最終有効年月内の農薬を使用し、ラベルに記載されている適用作物、使用時期、使用方法等を必ず確認してください。
- 適切な薬剤を選択し、病害虫が抵抗性を獲得しないように、同一系統薬剤の連続使用を避けてください。
- 農薬を散布する際は飛散しないよう対策を講じてください。

■ 発行 平成28年2月 埼玉県農産物安全課、一般社団法人埼玉県植物防疫協会
 ■ 問合せ先(原稿執筆)
 埼玉県病害虫防除所 TEL048-539-066)
 埼玉県農業技術研究センター生産環境・安全管理研究担当 TEL048-536-0409

